

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：32618
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2022
課題番号：19K23021
研究課題名（和文）ダンス・アーカイブ構築に向けた伊藤道郎とアーニー・パイル劇場に関する研究

研究課題名（英文）Towards the Construction of a Dance Archive: A Study on Ito Michio and the Ernie Pyle Theater

研究代表者
串田 紀代美（Kushida, Kyomi）
実践女子大学・文学部・准教授

研究者番号：80790906
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：これまで史実的根拠が不明で実態把握が困難であった占領期アーニー・パイル劇場に着目し、内部機構、興行システムの内実を解明した。日本側舞台製作部の中心的役割を果たした舞踊家・振付家・演出家の伊藤道郎（1893-1961）が1946年から1948年に関与した作品を特定し、劇場専属舞踊団の育成と演出戦略との関連性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アーニー・パイル劇場の日米の各運営形態と内部機構、興行システムの内実を明らかにし、伊藤道郎の上演基盤となった日本側舞台製作部ならびに劇場専属舞踊団の指導育成に関する資料を整理し、日本演劇史に位置付けた。さらに日米で活躍した伊藤道郎の資料の多様性を多角的視野から考察するため、米国人研究者と協働的に調査研究を行うとともに、20世紀の日本の洋舞草創期に国内外で活躍した舞踊家のダンス・アーカイブ構築化を進めた。

研究成果の概要（英文）：This research sheds light on the internal structure and theatrical system of the Ernie Pyle Theater during the occupation, the nature of which has remained elusive due to the lack of concrete historical evidence. In particular, it identifies the works in which the dancer, choreographer, and director Ito Michio (1893-1961) was deeply involved in their production on the Japan side from 1946 to 1948, and demonstrates their relationship to the development of the theater's residential dance company and its performance strategies.

研究分野：文化資源学、応用音楽学、民俗芸能

キーワード：伊藤道郎 アーニー・パイル劇場 東洋舞踊 民族舞踊 ステージ・ショウ テイコ・イトウ 伊藤祐司

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

伊藤道郎(1893-1961)は日本における洋舞草創期に渡欧し、その後27年間にわたり米国で活躍した舞踊家である。青年期に精力的に創作活動を行った米国では、「モダンダンスの開拓者」として位置づけられており、海外で高評価を得ていた。

1912年に声楽家を目指し渡独した直後、当時ダンスに傾倒していた山田耕筰の助言で舞踊に転向し、渡英後は能楽を通して作家E. パウンドとの交流を経て、W.B. イェイツ作『鷹の井戸』への出演などが話題となった。1916年の米国移住後は、当時米国で流行していたジャポニスムの恩恵を受け、ニューヨークとハリウッドでダンス・スクールを開校し、舞踊創作と振付に加え舞台演出を手掛け『ミカド』や『トゥーランドット』等をはじめ、野外音楽祭ハリウッドボウルでの群舞を演出するなど話題性が注目された。戦前期の舞踊実践に関する日本国内の伊藤道郎に関する先行研究は、武石(2000)、東條(2000, 2004)、柳下(2016)等がある。しかし、これらの成果は戦前期の活躍のみに集中している。この要因は、1943年の日本帰国後は晩年まで舞踊家としての目立った活躍が乏しく、戦前期の海外での華々しい活躍と比較して厳しい評価が形成されていたからといえる。

実は戦後日本の占領下において、伊藤道郎は1946年2月に連合軍専用慰安施設として開場したアーニー・パイル劇場(旧東京宝塚劇場)の総監督に就任し、日本側舞台製作部の中心的役割を担っていたことが断片的に把握されていた。しかしながら、これまで戦後日本の演劇史の俎上に載ることがなかったアーニー・パイル劇場の内部機構や興行システム、上演演目、出演者、舞台製作関係者等に関する情報を把握することは難しく、これらを解明する手がかりとなる国内の唯一の資料群は2014年に非公開資料となり、閲覧することが難しい状況であった。

著名な舞踊家の生涯にわたる活動実態を探ることが、なぜこれほどまでに困難を極めるのであろうか。その一因が、舞台上演関連資料の散逸とダンス・アーカイブ構築の遅れである。商業劇場における演劇、レビューやステージ・ショー等の作品は、公演チラシ、プログラム、チケット、台本、楽譜、創作ノート、アイデア等を記したメモ類、手帳、写真・映像等の記録資料など、舞台制作と上演に関わる有形・無形の資料が軽視されてきており、収集が困難を極めていたからである。以上の点を踏まえ、洋舞草創期に国外で研鑽を積んだ舞踊家の日本独自の舞踊創作の原点を探り、その活動実践の生涯にわたる解明に繋げるためには、散逸しやすい資料をデータベース化し国内外からのアクセスを可能にするアーカイブ構築が必須であるとの認識に至った。

2. 研究の目的

本研究は、洋舞草創期に欧米で活躍した伊藤道郎の生涯にわたる舞踊創作活動を明らかにし、特に20世紀初頭から1960年頃までの舞踊実践の再評価に繋げるため、日米に現存する一次資料を考証し、上演作品を時系列に沿って整理することを目的とする。従来は研究対象とされてこなかった連合軍専用慰安施設アーニー・パイル劇場で、総監督として伊藤道郎が手掛けた1946年から1948年までの作品群に着目し、実態を解明するため当該劇場の母体となった東京宝塚劇

場と日本劇場の人的交流、舞台製作方法との影響関係を考察する。この結果を踏まえ、占領期アーニー・パイル劇場の舞台で、日本、アジア、北米、南米の複数の文化イメージを一種のモチーフとして客体化し、国内外で高評価を得た伊藤道郎の上演作品の製作実態を解明し、演出戦略を分析する。

3. 研究の方法

(1) 伊藤道郎の欧米での舞踊実践が、アーニー・パイル劇場における舞台製作に与えた影響を明らかにするため、米国国立公文書館所蔵「占領期日本関係資料」(以下、NARA 資料)のうち「RG111 “Records of the Office of the Chief Signal Officer”, Photographs: Signal Corps U.S. Army, Photographs of American Activity, 1900 - 1981」の写真記録を中心に調査した。これにより、米国滞在期の伊藤道郎の創作状況や作品数の把握とともに舞踊レパートリーを特定し、伊藤道郎が得意とした東洋舞踊の着想の解明に繋げた。

(2) 伊藤道郎が創作した「東洋舞踊」の着想の原点を探るため、実弟の伊藤祐司とその妻で日系米国人の東洋舞踊家テイコ・イトウとの協働的關係性について考察した。ニューヨーク公共図書館パフォーミング・アーツ部門所蔵の新聞雑誌記事、写真資料、スクラップブック、上演プログラム等を調査し、戦間期に伊藤祐司とテイコ・イトウが日本、東南アジア、朝鮮を遊歴し、テイコが現地で習得した民族舞踊の演目、祐司が収集した資料、楽譜、衣装、装飾品、舞台装置について、国内で入手した新聞雑誌記事から特定した。

(3) 従来は日本人が立入禁止のため実態解明が難しかったアーニー・パイル劇場の内部機構、興行システムを把握し、1946年から1948年前半までの日本側舞台製作部が関与した上演作品の特定を目指し、早稲田大学演劇博物館所蔵「伊藤道郎関連資料(J 資料群)」(以下、演博資料)の調査を実施し、目録を作成した。写真アルバム、公演プログラム、台本、舞台ノート、手稿、書簡、メモ等の考証を行い、当該劇場が戦後日本の演劇史ならびに舞踊史で果たした役割と意義を確認するため、NARA 資料と演博資料の写真の比較検討を行った。

(4) 伊藤道郎をめぐる人的交流に注目し、舞踊創作活動に影響を与えた伊藤祐司とテイコ・イトウの日本滞在中の舞踊創作、上演、東洋舞踊の研究活動、日本劇場との影響関係を収集資料から把握し整理した。戦後に関しては、アーニー・パイル劇場の上演作品に関与していた劇場専属舞踊団団員、伊藤道郎舞踊研究所の門下生の証言を収集資料から考証し、当該劇場で伊藤道郎が関与した日本側舞台製作部の上演形態ならびに劇場専属舞踊団の活動実態を考察した。

4. 研究成果

(1) 日本演劇史の対象外にあったアーニー・パイル劇場を研究の俎上に載せ、上演機構と舞台製作の実態を可能な限り把握し整理した。従来アーニー・パイル劇場は、斎藤憐(1986)^{『幻の}

劇場アーニー・パイル』、藤田富士夫『伊藤道郎世界を舞う—太陽の劇場をめざして』等に言及があるものの、史実的根拠が不十分であり実態把握が難しかった。この点を踏まえ、内部機構、興行システム、日本側舞台製作部関係者、上演作品、劇場専属舞踊団、交響楽団、観客等についての内実を浮かびあがらせた。また伊藤道郎が関与した 1946 年から 1948 年までの作品を特定した。この時期の作品はトランスナショナルかつ異種混淆の題材が目立が、これは専属舞踊団の舞踊の技量に応じた伊藤道郎の演出戦略であることを明らかにした。国内外で高評価を得た代表作『ジャングル・ドラム』と『タバスコ』については、台本、写真資料（演博資料、NARA 資料）、日米の新聞雑誌記事、関連プログラムから概要、舞台装置、専属舞踊団の衣装を特定し、舞台装置と場面転換の関連性について指摘した。

(2)伊藤道郎の舞踊創作活動に強い影響を与えた東洋舞踊家のテイコ・イトウが戦間期に活動拠点とした日本劇場ならびにテイコ・イトウ東洋舞踊研究所における舞踊創作と上演活動に対する評価を舞踊批評から読み解いた。テイコが日系の出自ゆえに日本と東洋の舞踊表現を模索し、1938 年以降は招聘振付家として日本劇場でのレビュー作品に東洋舞踊を加味し、国内での認知に繋がったことを明示した。ニューヨークのラジオ・シティ・ミュージック・ホールの衣装と小道具製作を担当していた伊藤祐司の来日と東南アジア歴訪については、ブロードウェイの東洋舞踊と伝統音楽の受容が目的であったことが認められた。

(3)伊藤道郎の生涯にわたる舞踊創作活動の基盤となった米国時代の舞踊作品、演出に関わった作品、日本でのリサイタル作品を整理し、日本・東洋を題材とした舞踊作品と特徴を資料から特定するとともに、戦前と戦後の創作舞踊作品の特徴を比較分析した。戦前期は、日本の伝統舞踊、中国、東南アジアの民族舞踊から着想を得た動作と西洋舞踊の要素とを融合し、観衆の期待に応じて詩的で芸術的志向性の高い舞踊作品と大胆かつ簡素で象徴的な身体表現を得意とし、「東西の融合」を謳っていた。一方、戦後のアーニー・パイル劇場で製作された作品はこの系譜とは異なり、ジャンルを越境した異種混淆の題材によるトランスナショナルなステージ・ショウが 1 週間から 10 日の間隔で上演されていた。一例を挙げると、日本の伝統文化と戦後の新たな日本の象徴ともいえる現代文化の対比を主題化した作品を皮切りに、沖縄、東南アジア、南米の生活文化や民族舞踊を題材にした戦前の日本劇場「日本民族舞踊」の系譜から青年期における伊藤道郎の舞踊作品の影響関係を示唆する西洋舞踊まで、多様な上演作品であったことを一次資料から特定した。

(4)本研究課題において、非公開の演博資料に含まれるアーニー・パイル劇場関連の写真、文書、台本、プログラム、舞台ノート、メモ等を調査する機会が得られた。加えて『月報 Ernie Pyle Theatre』等を調査した結果、アーニー・パイル劇場に関与していた劇場部、舞台部、衣装部、技術部等による日米の各運営形態とは別に、芸能顧問（伊藤道郎、伊藤薫朔、宇津秀男、紙恭輔）、美術顧問（普門暁）が特別に設置され、劇場専属舞踊団の育成とともに日本劇場と東京宝塚劇場

の舞台製作関係者を含む人的交流が、アーニー・パイル劇場の舞台作品を特徴づけていることが確認できた。

(5)本研究課題においては、総じて伊藤道郎の生涯にわたる舞踊創作活動のうち、一定の評価が形成されてきた戦前期とは対照的な戦後の活動実践について、これまで日本演劇史の研究対象とならなかったアーニー・パイル劇場に焦点を当て、日米で収集した資料から可能な限り内実を明らかにした。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、米国での調査が実現できなかったが、国内外に現存する資料を総合的に検討した結果、アーニー・パイル劇場関連の資料をはじめ伊藤道郎の生涯にわたる活動の裏付けを可能にするのは演博資料であるという再認識に至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 申田 紀代美	4. 巻 36
2. 論文標題 伊藤道郎の民族舞踊観と東洋舞踊へのまなざし 1930年代から1940年代までの舞台の上の「東洋」の表象	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実践女子大学美術学術史学 = Jissen Women's University Aesthetics and Art History	6. 最初と最後の頁 (83) ~ (104)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002363	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 申田 紀代美	4. 巻 64
2. 論文標題 洋舞草創期の開拓者と東洋舞踊家テイコ・イトウの「郷土」と「民族」をめぐる言説 来日報道と新聞雑誌記事から浮かぶ日系米国人舞踊家像の分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実践女子大学文学部紀要 = The Faculty of Letters of Jissen Women's University annual reports of studies	6. 最初と最後の頁 (25) ~ (50)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002265	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 申田 紀代美	4. 巻 63
2. 論文標題 伊藤道郎の舞踊創作と特徴 - 関係者の証言から探るアーニー・パイル劇場のステージ・ショウ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002202	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 申田 紀代美	4. 巻 35
2. 論文標題 アーニー・パイル劇場のステージ・ショウ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践女子大学美術学術史学	6. 最初と最後の頁 53-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002178	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 申田紀代美	4. 巻 34
2. 論文標題 民俗芸能を題材とした舞台公演の系譜：日本劇場「東宝舞踊隊」、宝塚歌劇「日本民俗舞踊集」、国際芸術家センター「日本民族舞踊団」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践女子大学美術史学	6. 最初と最後の頁 53-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 申田 紀代美	4. 巻 37
2. 論文標題 オリエンタルダンスと東洋舞踊のはざままで 日本におけるテイコ・イトウの舞踊創作(1936-1940)と東洋舞踊観	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践女子大学美術史学 = Jissen Women's University Aesthetics and Art History	6. 最初と最後の頁 (55) ~ (68)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002407	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 申田 紀代美	4. 巻 65
2. 論文標題 伊藤祐司がブロードウェイにもたらした「東洋」 1930年代後半の日本・アジアにおける民族芸能の調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践女子大学文学部紀要 = The Faculty of Letters of Jissen Women's University annual reports of studies	6. 最初と最後の頁 (25) ~ (50)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002433	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 申田紀代美
2. 発表標題 民俗/民族を表象する舞踊の舞台化と系譜
3. 学会等名 東洋音楽学会東日本支部第110回定例研究
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------